

Maren R. Niehoff,
Jewish Exegesis and Homeric Scholarship in Alexandria
Cambridge: Cambridge University Press, 2011, pp. 222

出村 みや子

本書の目的は、これまで不明な点が多かった古代アレクサンドリアにおけるホメロス文献学とこの地で成立した聖書解釈の系譜の発展との関係を文献学的に辿ることにあり、ユダヤ教の聖書解釈をホメロス文献学の光の中で体系的に読むことで、アレクサンドリアのユダヤ人が二千年以上も前に聖書の批判的な文献学的研究方法を発展させていたことを明らかにしている。著者の Maren R. Niehoff はエルサレムのヘブライ大学のユダヤ思想学科の Senior Lecturer で、*The Figure of Joseph in Post-Biblical Literature* (1992), *Philo on Jewish Identity and Culture* (2001) などのアレクサンドリアのユダヤ教の発展やフィロンの著作についての多数の研究がある他、最近では 'Philons Beitrag zur Kanonisierung der griechischen Bibel', in *Kanon in Konstruktion und Dekonstruktion*, ed. E. -M. Becker and S. Scholz, Berlin and New York: DE GRUYTER, 2011 においてフィロンがギリシア語聖書の正典化に与えた影響について、また『ホメロス辞典 (*The Homer Encyclopaedia vol. II*, ed. M. Finkelberg, Oxford, 2011)』第二巻の「アレクサンドリアのフィロン」の項目や、'Homer in Philo's Writings', in *Festschrift for Yehuda Liebes*, ed. M. R. Niehoff, M. Meroz and J. Garb, Jerusalem: Bialik Institute and the Institute for Jewish Studies of the Hebrew University of Jerusalem, 2012 [in Hebrew] において、ホメロス文献学とフィロンとの関係について論じている。従って本書にも古典学から古代哲学、ユダヤ・キリスト教の聖書解釈に及ぶ幅広い学際的な傾向が見られる。

本書の内容を概略すれば、まず第1節で「問題設定」がなされ、その後第一部から第三部において古代アレクサンドリアにおいて発展したホメロス文献学とユダヤ教の聖書解釈の多様な発展との関係を示す具体例の検討が行われている。

本書の第一部では、ホメロス文献学に対するアレクサンドリアの初期ユダヤ教の文献学者たちの多様な態度が比較検討されている。ここで扱われるのは前二世紀半ばのユダヤ教の証言として、「アリストテラスの手紙」の著者、デメトリオス、アリストブロスの三人であり、この時期にアレクサンドリアの文献学はアリストタルコスの指導の下で最盛期を迎えていた。まず第2節では「七十人訳聖書」の成立について報告している「アリストテラスの手紙」について論じられる。この手紙の著者は、ムーセイオンで発展したアレクサンドリアの学問的方法が当時のエリート的ユダヤ人文化の間に見られる状況に対して批判的で、モーセ五書の聖性を主張して極めて保守的な立場をとっていたことが明らかにされている。さらに第3節ではデメトリオスと彼の匿名の同僚たちがアリストテラス的な「問いと答え」の方式を採用して行った聖書解釈の例が示され、第4節ではアリストブロスの「問いと答え」が哲学的教えのための道具となっていたことが論じられる。聖書のある矛盾する箇所の説明のために、「問いと答え」の方法を用いて他の箇所から説明するのは、聖書をその全体において「単一の作品 (unified corpus)」とみなす聖書の正典的理解が進展していたためである。

続いて第二部ではフィロンの著作について、その中にテキスト批判的なホメロス文献学を用いていた当時のユダヤ人たちの存在が確認されることが明らかにされている。これはフィロン研究で知られるジョン・ディロンが、フィロンが他の解釈者に言及するのは単なるレトリックで、実際の論争相手を指示しているのではないとみなしていることへの批判ともなっている。第5節では比較神話的手法を用いて旧約聖書の「バベルの塔の物語」を『オデュッセイア』第11歌308-320に記述されたアローエイダイの息子たちの同様の試みと比較したフィロンの匿名の同僚たちの聖書解釈が論じられ、第6節と第7節ではホメロスの叙事詩と並んでモーセ五書が、ユダヤ教と異教のそれぞれの陣営において正典的な役割を果たすテキストとして、詳細な解釈を施した多量の文書の集積が生み出されていたことが明らかにされる。ニーホフによれば、アリストブロスやフィロンの匿名の同僚はモーセのトーラーとホメロスの叙事詩の適合性を主張したのに対し、フィロンも当初はホメロスを人類の教育者として評価すると共に、ゼノドトス以来アレクサンドリアで標準化されたホメロスのテキストの区分に言及するなど、ギリシアの解釈法に親しんでいたものの、最終的にはユダヤ教の聖書の独自性を主張したという。

第三部では、フィロンのテキストの中にこれまでユダヤ人たちの間に見られたホメロス文献学の影響を徐々に転換する試みが確認されることが、彼の主要な三種類の聖書解釈に即して論じられている。まず第8節では聖書の連続注解の「アレゴリー解釈」シリーズについて、フィロンはここで高度な文献批判的素養を持つ彼のユダヤ人の同僚に答えており、彼らに対してフィロンは字義的研究に広範なアレゴリーを組み合わせた、より保守的なアプローチで応答していることが明らかにされている。このアプローチはアリストテレスとプラトンの新たな総合として理解されている。次に第9節では、聖書の連続注解の「問いと答え」のシリーズが扱われるが、このシリーズではあまり洗練されていない読者を対象としていることが示される。ニーホフは、ここで用いられた「問いと答え」の形式はもはや学術的道具としての意義を失っており、フィロン自身の学生たちの教育手段として用いられていた可能性もあるという。さらに第10節ではフィロンが「律法各論 (Exposition)」シリーズにおいて、アレクサンドリアの文献学的伝統とは決定的に距離をとっていることが指摘されている。前二者と異なり、こちらは連続注解ではなく、文献学的関心も希薄になっているが、その理由として挙げられているのは、アピオーンのような著名なホメロス学者が反ユダヤ主義者でもあったことや、本書の執筆時期がアレクサンドリアにおける政治的緊張の高まりと重なっていることで、フィロンはこの時期既に政治に関与して、ローマへの使節団の指導者としてローマに向かっていたのである。

以上のニーホフの研究から明らかになるのは、従来の研究において古代都市アレクサンドリアがヘレニズム世界におけるホメロス研究に指導的役割を果たした中心地であったにもかかわらず、その事実が驚くほど無視されてきたことである。それと同時にアレクサンドリアにおけるユダヤ教の聖書解釈もしばしば周辺的な現象としてか、あるいは困惑させる雑種とみなされる傾向にあった。それらは伝統的なユダヤ教のサークルの中でこれに同調することに失敗し、ギリシア的観念を反映してむしろキリスト教の先駆的役割を果たしたものとして退けられることとなった。ニーホフは、比喩的解釈法を発展させたペルガモンとは対照的に、アレクサンドリアで発展した学問は文献テキストに焦点を当てて研究を行い、特にホメロスの叙事詩の公式版を確定し、それらの文学的特徴を分析することに焦点が当てられていたことを示すと共に、これがユダヤ教の聖書解釈や正典成立にも多大な影響を与えたことを明らかにしている。

さらにキリスト教に関心を持つ学者たちは、アレクサンドリアにおけるユダヤ教の聖書解釈法をアレゴリー解釈に強調点を置いて考察し、しばしばプラトン主義やストア派の解釈の影響のみを問題とする傾向があり、この流れのなかで、フィロンはアレクサンドリアのクレメンスやオリゲネスその他の教父たちに道を備えたヘレニズム・ユダヤ教の代表者として注目されてきた。しかしニーホフの研究の独自の点は、フィロンの著作の複雑さの背後には彼の討論相手の見解や時代状況が反映していることを指摘するために、古代アレクサンドリアにおけるユダヤ教の聖書解釈の多様性をホメロス文献学の発展との関連において資料的に跡付け、そのための資料としてホメロス並びに中世のスコリアを参照していることである。

そのためにニーホフはまずホメロス研究の出発点がアリストテレスの『ホメロスの諸問題 (*Aporemata Homerica*)』と『詩学 (*Poetica*)』の第 25 章にあることに着目し、特に「問いと答え」の形式によるテキスト解釈に焦点を当てている。これらはプラトンの『国家』における詩人追放論に示されるような、当時広く知られた叙事詩に対する（哲学的でないゆえに、その記述には人を誤らせる内容が含まれているといった）批判に答えたものであり、アリストテレスは叙事詩を悲劇と同様の文学として評価することを求め、先人たちの批判とは異なる道を提起した。後にアレクサンドリアはヘレニズム世界におけるホメロス文献学の主要な中心地となるが、この地におけるアリストテレスの伝統は従来認められていた以上に影響力があり、アリストテレスの影響下で重要な注解書が生み出されたのである。残念ながらそれらの原典は失われてしまったが、ニーホフは『イリアス』と『オデュッセイア』のスコリアの中に、かなりの数の断片が残されていることに着目し、最近になって相次いで公刊されたスコリアの批判的校訂版 (H. Erbse, *Scholia Graeca in Homeri Iliadem (Scholia Vetera)*, 7vol, Berlin: DE GRUYTER, 1969-99; F. Pontani, *Scholia Graeca in Odysseam, vol. I: Scholia ad libros a-b*, Roma: Edizioni di storia e letteratura, 2007) を資料として、主要なアレクサンドリアのホメロス文献学者たちについて論じている。さらに紀元前後のアウグストゥス帝時代のアレクサンドリアの文献学の証言については、二人の文献学者アリストニコスとディデュモスが検討されている。両者の原典も失われたが、ニーホフは両者のホメロス解釈については、中世の写本のスコリア、特に古代アレクサンドリアの資料を保持している *Venetus A codex* の資料に依拠して明らかにして

いる。

以上の資料の検討を通じてニーホフは、アレクサンドリアの文献学が洗練の度合いを増したのは、「問いと答え」の方法に示されるアリストテレス的概念を明確に採用したことによるのであり、フィロンの意義は彼自身もかつてはその影響下にありながら、時代状況に応じてその転換を図り、最終的には独自のアレゴリー解釈によって正典としての聖書の位置づけに寄与した点にあることを示している。その意味で本書はヘレニズム・ユダヤ教の複雑な発展の理解に一つの明確な道筋をつけると同時に、その成果はキリスト教思想家やラビたちの内在的聖書解釈の成立のみならず、ポルピュリオスやロンギノスなどの新プラトン派のアレゴリー解釈の問題にも示唆を与えるものである。

KRÁNITZ Mihály

ÓRIGENÉSZ: A hit nagy mestere

(クラーニッツ・ミハーイ『オリゲネス：信仰の偉大なる師』)

Catena monográfiák 10, Budapest: Kairosz Kiadó, 2008, pp. 276,

ISBN 978-963-662-030-1, ISSN 1587-2599, A/5, 3000 Ft.

秋 山 学

本書は、評者が本誌において継続的に紹介を行っている「カテナ・シリーズ」のモノグラフ第10巻に相当し、著者の既発表論文集に当たるものである。まず、著者のクラーニッツ・ミハーイ師は1959年8月10日ブダペシュト生まれ、1989年6月10日にブダペシュトにてローマ典礼カトリック教会の司祭に叙階される。1990-91年ブダペシュト郊外ヴァーツィ通り教会での助任司祭職を皮切りに、1991-93年ローマ・グレゴリアナ大学での研鑽期間をはさみ、1993-97年ブダペシュトの神学アカデミー総監 (prefektus) 職を経た後、1996年よりパーズマニ=ペーテル・カトリック大学基礎神学講座の主任を務めておられる。この間2003年から2006年まで、パーズマニ大学学長代理の要職に就いておられた。

筆者は、クラーニッツ師とは年に二度お目にかかることが多い。それは、6月